

令和8年度 学位授与式 学長式辞

皆さん、本日は、学位の取得、誠におめでとうございます。また、今日まで皆さんを支えてこられたご家族、関係者の皆様にも、心よりお祝いを申し上げます。

今日、ここには、学士、修士、そして博士、それぞれの学位を取得された皆さんが集っています。もちろん、それぞれの学位が意味するところは同じではありません。

学士の皆さんの多くは、卒業研究などを通して、初めて本格的な研究活動に取り組んだことと思います。指導教員のもとで、問いを立て、調べ、考え、実験や分析を行い、その結果をまとめる。そうした一連の経験を通して、大学での学びの一つの到達点に達しました。修士の皆さんは、さらに専門性を深め、ご自身の研究成果を学会などで発表し、専門家から評価を受ける経験をされた方も多いでしょう。そして博士の皆さんは、自ら新しい問いを立て、オリジナルな成果を生み出し、それを論文や国際会議などを通して学界に問い、その評価を受けて、今日、学位の取得に至りました。

そこに至るまでには、思うような結果が出なかったり、自分の考えが否定されたり、研究そのものに迷ったりしたこともあったことでしょう。そうした過程を乗り越えて、今日この日を迎えた皆さんの努力に、改めて敬意を表したいと思います。

さて、今日は皆さんへのお祝いにあたり、私自身が長年考えてきたことを、一つお話ししたいと思います。それは、専門を深く究めることはもちろん大切ですが、同時に、専門の外にも目を向けることが大切ではないか、ということです。

皆さんは大学で、それぞれの専門分野を学んできました。研究では、問いを立て、仮説を考え、それを実験や観察、調査、論証などによって確かめる。もちろん分野によって方法は異なりますが、皆さんはそれぞれの学問分野に固有の「ものの考え方」を身につけてきたはずで、特に博士の学位を取得した皆さんは、その分野のプロフェッショナルとして仕事をしていくための方法論を、十分に身につけたと言ってよいでしょう。これは大変重要なことです。

しかし今日は、あえてその先のことを申し上げたい。専門を深く究めれば究めるほど、注意しなければならないことがあります。それは、自分の専門分野からしか世界を見なくなる、さらには、自分の専門分野以外への関心そのものを失ってしまうことです。

私は若い頃、理論物理、計算物理の研究に専心していました。原子核理論や量子カオスを研究し、その後は数値線形代数をはじめとする数理科学の研究にも取り組みました。

若い頃の私は、よい研究をするためには、自分の専門をできるだけ深く掘り下げればよい、と考えていたように思います。もちろん、それは間違いではありません。専門を深めることは、研究者にとって不可欠です。

しかし、その後、さまざまな経験をし、また社会が急速に変化していく姿を目の当たりにするなかで、それだけでは足りない、と強く感じるようになりました。

私たちがいま直面している問題を考えてみてください。地球環境、エネルギー、貧困、格差、戦争、人口問題。そして、急速に発展する生成 AI。どの問題をとっても、一つの専門分野だけで答えを出すことはできません。生成 AI 一つを考えても、情報科学や数学だけの問題ではありません。経済や法律、教育、倫理、文化、さらには「人間とは何か」という問いにまでつながっています。

ですから、皆さんには、これからも専門を深め続けてほしい。しかし同時に、専門の外に目を向けることも、決してやめないでほしいと思います。大学を卒業したから、あるいは大学院を修了したから、学びが終わるわけではありません。むしろ今日から、皆さん一人ひとりが、自分で自分の学びを設計する時代が始まります。

そのとき大切なことは、ただ知識を増やすことではありません。本をたくさん読む。いろいろなことを知っている。それだけでは、私は十分ではないと思っています。大切なことは、得た知識や経験を、自分の中でつなぐことです。何を大切にするのか。何に疑問を感じるのか。社会の何を変えたいと思うのか。突き詰めれば、自分は何をなすために生きていくのか。そうした問いに自分なりの答えを持つことが大切です。自分なりの軸を持っている人は、新しく得た知識や経験を、それまで自らが培ってきた知識や経験とつなげることができます。点だった知識が線になり、線が面になり、やがて一つのネットワークを形づくっていく。私は、そのネットワークこそが、その人の「個性」なのではないかと考えています。個性というのは、単に人と違ったことをすることではありません。自分がこれまで学んだこと、経験したこと、考えてきたことを、自分なりの価値観によって結びつけ、自分なりの世界の見方をつくっていく。それが、その人にしかない個性になるのだろうと思います。

実は、自分なりの軸を持っている人ほど、自分自身を相対化することができます。自分とは違う考え方に会ったとき、それを拒絶するのではなく、「なぜこの人はこう考えるのだろう」と考えることができる。自分の専門とはまったく違う分野にも関心を持つことができる。自分の考えが間違っているかもしれない、と考える余裕も生まれる。そうして自分の外に目を向け、学び直し、また自分自身をつくり直していく。この循環を、生涯続けてほしいと思います。

ただ、ここで一つ問題があります。専門の外に出た瞬間、私たちは「専門家」ではなくなります。私自身、物理や数理学についてなら、専門家として話すことができます。しかし、教育、経済、社会、文化、芸術、国際問題について話すとき、私はその分野の専門家ではありません。いわば、アマチュアです。しかし、だからといって常に沈黙を守っていてよいのでしょうか。私は、そうではないときもあると思います。

パレスチナに生まれ、アメリカで文学研究者、評論家として活躍したエドワード・ワディ・サイードという人がいます。サイードは、講演集『知識人とは何か』のなかで、知識人とは、周辺にいる者であり、アマチュアであり、権力に対して真実を語ろうとする言葉の使い手である、という趣旨のことを述べています。私は、この「アマチュア」という言葉がとても重要だと思っています。

専門家として、専門について責任を持って語る。しかし同時に、専門外の問題についても、一人の市民として、一人の人間として考え、必要ならば発言する。もちろん、専門家への敬意は必要です。知らないことを知っているかのように語ってはいけません。しかし、「私は専門家ではないから」と言って、社会の重要な問題について考えることまで専門家に任せてしまう。それでは、異なる分野の間に本当の対話は生まれません。時には、アマチュアとして、専門家に問いかける勇気も必要です。

実はサイード自身が、そのような生き方をした人でした。彼は文学研究者でしたが、同時に優れたピアニストであり、音楽評論家でもありました。サイードは、1999年、ユダヤ系の音楽家ダニエル・バレンボイムとともに、「ウェスト＝イースタン・ディヴァン管弦楽団」、日本語では「西東詩集管弦楽団」と呼ばれるオーケストラをつくりました。この名前は、ドイツの文豪ゲーテの詩集『西東詩集』に由来します。ゲーテは、遠く離れたペルシャの詩人ハーフェズの作品に感銘を受け、時代も文化も異なる東洋と西洋が、互いを尊重しながら出会う可能性をそこに見いだしました。サイードとバレンボイムは、その名前をオーケストラに託しました。

西東詩集管弦楽団は、イスラエルとアラブ諸国などから、若い音楽家たちを集め、一緒に音楽を奏でます。政治的な立場や民族、宗教の違いを消してしまうものではありません。違いを持ったまま、一つの音楽をつくる。相手の音を聴き、自分の音を出し、また相手の音を聴く。それを繰り返しながら、一人では決してつくることのできないものを、一緒に作り上げていく。私はそこに、これからの社会を考えるうえで、とても大切なものがあると考えています。

残念ながら今日、世界ではさまざまな分断が深まっています。イスラエルとパレスチナの問題も、その一つです。政治や宗教、民族、国家という大きな対立の前では、一つのオーケストラにできることなど小さい、と考える人もいるかもしれません。しかし、私はそうは

思いません。異なる背景を持つ若者たちが、互いを国籍や民族や宗教という枠で見る前に、一人の人間として出会い、向き合い、同じ時間を過ごし、一つのものをつくる。そこには、分断を乗り越える社会の小さなモデルがあります。

考えてみれば、大学もまた、そのような場所ではないでしょうか。異なる専門を持つ人が出会う。異なる国や文化から来た人が出会う。違う価値観を持つ人と議論する。自分の考えを述べ、相手の考えを聞き、ときには自分の考えを修正する。皆さんは、そうした経験を大学で積み重ねてきたはずです。今日、学位を手にする皆さんには、ぜひ、その経験をこれからの社会で生かしていただきたいと思います。

専門家として、深くあってください。しかし同時に、一人の人間として、広くあってください。自分の専門については、プロフェッショナルとして責任を持つ。しかし専門の外では、勇気あるアマチュアになる。知らないことを恥じるのではなく、問いかける。異なる考えを恐れるのではなく、対話する。そして、さまざまな知識や経験を、自分なりの価値観のもとでつなぎ合わせ、自分にしかない知のネットワークを、生涯かけて育てていってください。

今日取得された学位は、皆さんが一つの地点に到達したことを証明するものです。しかし同時に、それは新しい出発点でもあります。これから皆さんがどのような道を歩むかは、一人ひとり違うでしょう。研究者になる人もいるでしょう。企業で働く人、公務に携わる人、教育に携わる人、あるいはまったく別の道に進む人もいることでしょう。どの道に進んでも、自分の専門を大切にしながら、その外に広がる世界にも目を向けてください。そして、自分は何に価値をおき、何のために学び、何のために仕事をするのか。その問いを、折に触れて自分自身に投げかけてください。答えは、一度決めたら変えてはいけない、というものではありません。学び、新しい人と出会い、経験を重ねるなかで、答えも変わっていくことでしょう。皆さんのなかにある知的ネットワークも、絶えず変化していきます。そういう意味では、私たちは皆、生涯「発展途上人」です。それでよいのだと思います。大切なのは、問い続けることです。

皆さん一人ひとりが、教養豊かな専門家として、そして必要なときには勇気あるアマチュアとして、自分とは異なる人々と対話し、社会のさまざまな課題に向き合っていくことを期待しています。皆さんのこれからの人生が、豊かで実り多いものとなることを心より願い、私からのお祝いの言葉といたします。

本日は、誠におめでとうございます。

令和8年9月18日
埼玉大学長 重原 孝臣

President's Address at the 2026 Saitama University Degree Awarding Ceremony

Ladies and gentlemen, I would like to extend my heartfelt congratulations to all of you on receiving your degrees today. I would also like to offer my sincere congratulations to your families and everyone who has supported you along the way.

Those who have earned bachelor's, master's, and doctoral degrees are gathered here today. Of course, each of these degrees carries a different meaning.

For many of you receiving bachelor's degrees, your graduation research project was your first experience engaging in fully fledged research. Under the guidance of your faculty advisor, you formulated a research question, conducted research, considered your findings, performed experiments and analyses, and synthesized your results. Through these experiences, you have reached a significant milestone in your university education. Many of you in the master's program have further deepened your expertise and gained experience presenting your research findings at academic conferences and receiving feedback from experts. And for those receiving doctoral degrees, you have formulated new research questions on your own, produced original findings, presented them to the academic community through academic papers and international conferences, received evaluation, and have now earned your degrees today.

On your journey to this point in your life, no doubt there were times when you didn't achieve the results you hoped for, when your ideas were rejected, or when your research lost direction. I would like to once again express my deep respect for the perseverance and effort that have brought you to this day.

Today, to celebrate this occasion with all of you, I'd like to share one thought that I've been pondering for many years. While it is certainly important to dive deeply into one's field of expertise, I believe it is equally important to look beyond the boundaries of that field.

During your time at university, each of you has studied your respective fields of specialization. In research, you formulate questions, develop hypotheses, and test them through experiments, observations, surveys, and arguments. While the methods of course vary by field, you have undoubtedly acquired a way of thinking unique to your respective academic disciplines. Those of you who have earned a doctoral degree can especially be said to have thoroughly mastered the methodology necessary to work as professionals in your fields. This is extremely important.

However, today I would like to go a step further. The more deeply you dive into your field of expertise, the more you must be careful of one thing: the risk of seeing the world solely through the lens of your own field and, furthermore, the risk of losing interest in anything outside of it altogether.

When I was young, I devoted myself to research in theoretical and computational physics. I studied nuclear theory and quantum chaos, and later tackled research in mathematical sciences, including numerical linear algebra. I think that in my youth, I believed that to conduct good research, all I needed to do was dive as deeply as possible into my own field of specialization. Of course, that is not wrong. Deepening one's expertise is essential for a researcher.

However, as I went on to gain various experiences and witnessed society changing rapidly, I came to feel strongly that this alone was not enough.

Consider the issues we face today: the global environment, energy, poverty, inequality, war, and population issues. And then there's the rapidly advancing field of generative AI. Regardless of which issue you look at, it cannot be resolved by a single field of expertise alone. Even generative AI, on its own, is not merely a matter of computer science or mathematics. It is connected to economics, law, education, ethics, culture, and even the fundamental question of "What does it mean to be human?"

Therefore, this is why I hope you will continue to deepen your expertise in your respective fields. At the same time, however, I hope you will never stop looking beyond the boundaries of your specializations. Just because you have graduated from university or graduate school does not mean your learning is over. Rather, starting today, a new era begins in which every one of you will design your own learning path.

What's important at that point isn't simply accumulating knowledge. Reading lots of books. Being knowledgeable. I don't think that alone is enough. What matters is connecting the knowledge and experiences you've gained within yourself. What do you value? What makes you question things? What about society do you want to change? Ultimately, what are you living for? It's important to have your own answers to these questions. People who have their own core values can connect newly acquired knowledge and experiences with the knowledge and experiences they've cultivated up to that point. Knowledge that was dots becomes a line, the line becomes a plane, and eventually, it forms a single network. I believe that this network is precisely what constitutes a person's individuality, which isn't simply about doing things differently from others. It's about connecting what you've learned, experienced, and thought about so far through your own values to create your own unique perspective on the world. I believe that is what becomes the individuality unique to that person.

In fact, the more firmly grounded a person is in their own principles, the better able they are to see their own views in a broader perspective. When they encounter a way of thinking different from their own, rather than rejecting it, they can ask themselves, "Why does this person think this way?" They can develop an interest in fields completely outside their area of expertise. They also gain the mental flexibility to consider that their own ideas might be wrong. In this way, they look beyond themselves, relearn, and continually reshape who they are. I would like you all to continue this cycle throughout

your lives.

However, there is one problem here. The moment we go outside our specialties, we are no longer experts. Personally, I can speak as an expert on physics and mathematical sciences. However, in terms of education, economics, society, culture, the arts, and international issues, I am not an expert in those fields. I am, so to speak, an amateur. But should I always stay silent? I think there are times when that is not the case.

There was a man who was born in Palestine and worked as a literary scholar and critic in the United States whose name was Edward Wadie Said. In his collection of lectures, *Representations of the Intellectual*, Said argues, in essence, that an intellectual is an outsider, an amateur, and a wordsmith who seeks to speak the truth to power. I believe this term “amateur” is very important.

As experts, we should speak responsibly about our fields of expertise. At the same time, however, we should also think about issues outside our areas of expertise and, when necessary, speak out as citizens and as human beings. Of course, respect for experts is essential. We must not pretend to know what we do not know, but if we say, “I’m not an expert,” and leave it entirely to experts to think about important social issues, then no genuine dialogue can emerge across different fields. Sometimes, as an amateur, we need the courage to challenge experts.

In fact, Said himself lived such a life: He was a literary scholar, but he was also an accomplished pianist and music critic. In 1999, Said founded the West-Eastern Divan Orchestra together with the Jewish musician Daniel Barenboim. This name derives from the poetry collection “West-Eastern Divan” by the great German writer Goethe, who was deeply moved by the works of the Persian poet Hafez and saw in them the possibility of an encounter between the East and the West, despite their differences in era and culture, based on mutual respect. Said and Barenboim chose this name for their orchestra.

The West-Eastern Divan Orchestra brings together young musicians from Israel, Arab countries, and elsewhere to make music together. This does not mean erasing differences in political views, ethnicity, or religion. Rather, they create a single piece of music while embracing those differences. They listen to each other’s sounds, play their own, and then listen again. Through this process of repetition, they work together to create something that they couldn’t create by themselves. I believe this is very important for us as we consider the future of society.

Unfortunately, various divisions around the world are deepening today. The conflict between Israel and Palestine is one such example. Some might think that in the face of major conflicts over politics, religion, ethnicity, and national identity, what a single orchestra can achieve is insignificant. However, I do not share that view. When young people from different backgrounds meet as individuals, rather than viewing one another through the lens of nationality, ethnicity, or religion, they engage with one

another, spend time together, and create something as one, and they build a miniature model of a society that overcomes division.

Come to think of it, isn't university also a place like that? It's a place where people with different fields of study come together. It's a place where people from different countries and cultures meet. It's a place where you engage in discussions with people who hold different values, you express your own thoughts, listen to others' perspectives, and sometimes revise your own views. I'm sure you've all accumulated such experiences during your time at university. To all of you receiving your degrees today, I sincerely hope you will put those experiences to good use in society moving forward.

As professionals, strive for depth. But at the same time, as human beings, cultivate breadth. In your own fields, take responsibility as professionals. Beyond those fields, have the courage to be amateurs. Do not be ashamed of what you do not know; instead, ask questions. Do not fear differing opinions; instead, engage in dialogue. And please spend your entire lives connecting diverse knowledge and experiences based on your own values, cultivating a network of knowledge that is uniquely your own.

The degree you have received today certifies that you have reached a certain milestone. At the same time, however, it is also a new starting point. The paths you will take from here on will differ for each of you. Some of you will become researchers. Others will work in the private sector, serve in public office, pursue careers in education, or perhaps take entirely different paths. Whichever path you choose, cherish your field of expertise while also keeping your eyes open to the world beyond it. And ask yourselves from time to time: What do I value? Why do I study? Why do I work? The answers to these questions are not set in stone once decided. As you continue to learn, meet new people, and gain experience, your answers will inevitably evolve. The intellectual networks within each of you will also be in a state of constant flux. In that sense, we are all "works in progress" throughout our lives. And I believe that is perfectly fine. What matters is that we continue to ask questions.

I expect every one of you, as well-rounded professionals and, when necessary, as courageous amateurs, to engage in dialogue with people different from yourselves and to address the various challenges facing society. I sincerely hope that your lives ahead will be rich and fruitful, and with these words, I conclude my remarks.

Once again, congratulations to you all.

September 18, 2026
Takaomi Shigehara,
President, Saitama University